

私は朝食はしつかりとる方である。

食堂で出されるメニューは毎日変わらず、パンに豆のスープ、ゆで卵。パンは一人二つまで、ゆで卵は一個だ。パンは夕食に出されるものと違ってもちもちとして食べ応えがあるけれども、私は断然足りないと思っっている。この時にどのくらい食べられるかで昼までの動きが決まるのだ。今日は特に担当がなくて雑務が中心の日だから、しつかりと食事をとっておかなくては。

とはいえ、心配はいらない。大体このくらいの時間になれば、おかわりが向こうから私のもとにやってくるからだ。

「どなたさま、どなたさま、私のパンを半分食べてくださらないかしら？」

私は大いににんまりとして、歌うような声に答えた。

「あなたがお探しのものは、ここにいますよ！」

振り向いて金髪の少女と目が合い、一瞬間が空いて二人で吹き出した。少女がパンを私に手渡す。

「はいヤード、今日の分のパン」

「ありがとう！ リイサがいないと私、お昼を待たずに死んでるよ」

さつそくパンに噛り付く。

「いつもながら、よくそんなに食べられるわよね。私なんて朝はパン一枚も入らないのに」

「いや、それはリイサが食べなさすぎじゃない？」

口をパンで膨らませたまま、リイサのエプロンの巻かれた腰回りを見る。多分自分の二分の一くらいしかなさそうだ。

「普通の人と比べてもよ！ パンもゆで卵も特別大きいのを選んでるし、これから部屋に帰ってからも買い置きを食べるんでしょ？」

「スープも大盛にしてもらってるよ！」

私がニッコリ笑顔でそう答えると、リイサは呆れたような溜息をついた。

「まあ今日はいつもとより張り切って食べてるよ。今は担当がないしね」

いつもこの通り全力で食べているわけではない。お腹いっぱい食べるようにはしているけれど。

「そうね。昨日が雨だったから、今日は洗濯物が溜まつてると思うわよ。頑張ってるね」

「うげえ……洗濯地獄か……おばさん張り切ってるだろうなあ……」

あれをしろ、これがしたいと担当しているお客様に振り回されるのもそれはそれで疲れるけれど、単純な肉体労働……つまり雑用だの他のお客様の介助の手伝いだのをひたすらこなさなければいけないのは、エネルギーを根こそぎ持つていかれる気がして大変なのだ。窓の外を見ると気持ちいいくらい

い晴れていて、絶好の洗濯日和と言える。洗濯を取り仕切っておばさんが私達下っ端見送り人をコキ使うべく、手ぐすね引いて待つているに違いなかった。

今から痛むであろう腰に思いをはせて、ひとつ溜息をついた。ともあれ、朝食の残りを早く片付けてしまわなくては。食事の時間は限られているのだし、遅れていったらさらに面倒な事態に巻き込まれるのは目に見えている。

「じゃ、私そろそろ行くわね。そろそろお客様が起きる時間だから」

私がスプーンをくわえたまま軽く手を振ったのを見て、リイサは歩き出した。すでにゆで卵はお腹の中に消え、あとはパンをスープに浸して食べるだけだ。私はパンをちぎろうとした。

「あーいた、ヤーデ！」

駄目だった。

見送り人の同僚がこちらに歩いてくる。

「まーだ食ってんのかお前、相変わらず食べるのだけに全力出しやがって、他に楽しいことねえのかよ」

「うっさいよ。それより、用事を早く言ってよね」

食べるのが一番なのは事実だけれど、放っておいてほしい。

「あーそうだった、院長が呼んでるぜ。今すぐ院長室に来いっ

てさ」

「は？」

思わずとぼけた声が出てしまった。

院長室に下っ端が呼ばれるなんて、大体的場合……そういうことだ。なにか問題が起きたか、起こしたか。

「ちよっと、何でヤーデが呼ばれなきゃいけないわけ？」

まだ行っていないなかったらしいリイサが顔をしかめている。私の聞きたかったことを聞いてくれてありがたい。

「俺はただ呼べって言われたただだよ。なあ、お前何やったわけ？」

知っているわけがない。好奇心を全面に出している彼には申し訳ないが、全く心当たりがない。

「知らないよ」

「そうかよ、じゃあ確かに伝えたぜ」

途端に興味を失ったらしく、足早に去っていった。

「ヤーデが呼ばれるなんて、初めてじゃない。ほんとに心当たりはないの？」

「残念ながらね。でも悪いこととは限らないよ、むしろいいことが起こるかもしれない」

給料が上がるとかね、と冗談めかして言えば、心配してるのよ、と怒られてしまった。

「まあ、なるようにしかならないよ、うん。とにかく行って

みる」

差し当たっては、朝食を片付けてしまわなければ。

再びパンをちぎりだした私を見て、

「相変わらず肝が据わってるんだか、鈍いんだか……」

リイサは深く深く溜息をついていた。食べられるより幸せなことって、そんなになく思うのだ。

院長室の前は何度も通ったことがあるけれども、実際に中に入るのは初めてだった。下っ端で何回も入ったことがあるというのは素行が相応に悪いとかそういうことだから、当たり前前のことではあるのだが。

思ったより調度品の少ない院長室で一番目を引くのは、壁一面の窓だ。貴重なガラスをたくさん使っているのはさすが一番偉い人の部屋といったところか。

「誤解のないように初めに伝えておきたいのは」

そう前置きしてから、暗い色のヴェールをまとった院長は話し始めた。

「あなたをここに呼んだのは、あなたが何か不名誉な事態に巻き込まれた、というわけではないということです。当たり前ですが、あなたが不名誉な事態を起こした、というわけでもありません」

そこで言葉を切り、院長はこちらをじっと見つめた。正直

とてもほっとしている。心当たりがないから大丈夫とは思いつつも、万が一、ということを考えていたから。

しかし怒られるためにはないとすると、一体なんのために呼ばれたのだろうか。

「あなたの評判は聞いています」

院長が再び話し始める。

「まだ院に勤め始めて一年もないが、どの仕事もきちんとこなす。肉体労働にも不満を漏らすことはなく、難しいお客様にも誠実に対応する。周りとの人間関係も良好だと」

「……どうも」

これは冗談だと思っていた給料上げも現実になるかもしれない。ふはははは、ようやく私の食生活もレベルアップか。

胸の高鳴りが止まらないな。

……となるわけもなく。突然の褒め殺しに私は院長を思いつきり不審な目で見てしまった。ここまで持ち上げる意図はなんだ？ ヴェール越しでは表情が窺い知れない。

「今度、院に新しいお客様がいらつしやいます」

「はあ」

「長らく国境付近の警備を統括されていた方です。……国境については何か知っていますか？」

「隣国との小競り合いが続いている、くらいの話は聞いています」

「ええ、その通りです。その国境線がこの十年後退すること
が無かった、むしろ前進していったのは、彼の功績と言って
間違いないでしょう」

……だんだん話が読めてきた。

「そのお客様を、あなたに担当してもらいたいのです」
ほらきた。

「……お言葉ですが、そのくらい身分の高い方であれば先輩
方が担当するのが筋なのでは？ 私のような未熟者では力不
足だと思いますが」

なんだってこつちにそんな大役が回ってくるんだ？ そう
指摘すると、

「その方が院にいらつしやる理由なのですが」

そこまで言つて非常に言いにくそうに、

「お家に代々伝わる呪いが、ついに彼にも発動してしまつた
そうです。一度発動した以上、いつその心臓が止まるか分か
らないと。その方はすでに職を辞され、こちらに向かわれて
います」

なるほど、理解。

「つまり、呪われた、しかも軍人でたくさん人を殺してきた
であろう人に近づいて穢れを浴びたくない。そう考えた方々
が軒並み担当を拒否したと。それで私にお鉢が回つて来たん
ですね？」

ずばりと包み隠さず言うと、微動だにしないヴェールが少
しだけ、ほんの少しだけさらりと揺れた。動揺したのらう
か。

「あまりそのようなことをはっきり言うものではありません」
申し訳ない。けれど否定しないところはその通りだったよ
うだ。

「……これは命令ではありません。院は義務として聖なる火
を求めてきた者に部屋を与えなければなりません、世話を
する者を付けることまでは必須ではありませんから。しか
し……」

「やりますよ」

私は即答した。先輩方に仕事を取られたと誤解される必要
がないなら、断る理由はない。

院長の表情は相変わらずわからないけれど、驚いているよ
うに思えた。こんなにもすぐ受け入れられるとは思っていな
かったのらう。

「その方がいらつしやるのはいつですか？」

「え、ええ……二日後の予定です。それまでにお使いになる
予定の部屋を整えておきなさい」

「わかりました。他にご用件は？」

「ありません。行つてもいいですよ」

「失礼します」

話が済んだのであれば、もう長居する必要はない。さつさと出ていこうとして、足を止めた。

「どうしたのですか？」

「今日は私は雑務の予定だったのですが、見事に遅刻です」

「……わかりました。わたくしが一筆書きましよう」
やった。

この町は、火を中心に回っている。

その身に答^{とが}在りし者、その身に穢れ在りし者、死して聖なる火に身を捧ぐべし。さすればその魂、清められん……とまあ要するに、死んだら火に焼かれればいい感じに罪が消えるよーという旨が聖典に書いてあるわけである。尊き天上におわします女神さまが何を思っそう書いたのかは私風情にはわかる由^{よし}もないが、その聖なる火はこの町にあるのだ。

すべての人が女神さまを信じるこの国では、大抵の人が死後は焼かれない……じゃなくて、火に身を捧げたいと思っっている。大抵の場合は別の場所で死んだ後に遺体だけこの町に来るのだけれど、お金と権力を両方兼ね備えた方々はさらに上を望むのだ。つまり、死ぬのもこの町がいいと。

対外的にはこの町は聖地と呼ばれているわけで、聖地で一生を終えるのは上流階級の人々にとつて一種のステータスなんだそう。しかして聖地は聖地ゆえに修道院以外の建物が

存在しない。じゃあ死ぬまでどこに滞在するのか？

答えもまた、修道院以外存在しないわけである。

我々〈見送り人〉とは、死して火に身を捧げるその瞬間まで、修道院に滞在する貴人に奉仕する存在である。

さすが国防の英雄、個室の中でも大きな部屋が宛がわれていた。久しく使われていなかったその部屋は結構埃が溜まっていた。掃除して寝具をそろえてついでに空気を入れ替えて……などと意外とやるが多かった。「部屋の準備……サボれる！」という私のもくろみは見事に立ち消えたので、ちよつとだけ私は気分が盛り下がった。ちよつとだけ。

数々の準備を終えて、今日はお客様が到着する日である。私はお客様の部屋のドアの前に立っていた。出迎えと部屋の案内は私より偉い人がやることになっているので、これから英雄様とご対面である。

どんな人だろうか。軍隊のノリでやたらと怒鳴ってくるんじゃないといいな、耳が痛くなる。どうか楽々扱えるお客様でありますように。

そんな思いを込めてノックした。

「失礼します。入らせていただいても大丈夫でしょうか」

「はい、どうぞ」

返って来たのは思ったより柔らかい声だった。渋いバリトンというよりは、軽めのテノール。少しの違和感。

許可は貰えたので、遠慮なくドアを開けて部屋に入った。

……おおつと。私が今まで想像した軍人像（国境で敵をボッコボコにしていたものとする）は、筋肉モリモリの体にオーラルバックの頭、眼光は鋭く、眉間には十字の傷が刻まれている感じだった。

対して目の前でベッドに身を起こしている男性は、その正反対といっても過言ではなかった。少なくとも見た目は。

筋肉はついていいるのだろうけれども細身の体に、金色の巻き毛、明るい緑の瞳はなんとなく丸みを帯びていて、鋭角的な要素は見当たらない。全体を端的に表現するならば、優男といった言葉が似合う。あまりにも軍人という職業にそぐわない見た目をしていた。

予想外の見た目に一瞬間くらうが、気を取り直して軽く頭を下げた。

「お客様の見送り人を務めさせていただきます。ご要望がございましたら、何なりと私にお申し付けください」

顔を上げると、彼は意外そうな顔をしていた。

「よろしくね……えつと、名前は？」

「ヤーデと申します」

「そっか、ヤーデちゃんだね。お世話になるよ、軽い。」

初対面からちゃん付けとは。びっくりするほど軽い。もしくは私が知らないだけで、軍隊ではお互いちゃん付け

するのが慣例なのか？ 恐ろしい世界だ……。

まだ見ぬ軍隊の常識と思しきものに戦慄したところで、部屋に私と彼以外誰もいないことに気が付いた。

「あの、お客様。お連れになった使用人の方々はどちらに？」

私達が奉仕する存在といっても、実はそんなに直接お客様に接する仕事はない場合が多い。というのは、この町で死ぬ力がある方々は、大抵の場合自前の使用人を連れてきているからだ。となると見送り人の仕事はどうなるかというと、死ぬ前にあれが食べたいとかあそこの修道院のモザイクが見たいとか部屋が隣の美しいご婦人とお茶がしたいとか、そういうワガママの調整が主だ。見送り人に一番必要なのは調整力と対話力である。

国境警備の責任者となれば結構なお家柄のはずである。使用人を連れてきていないわけがない。そう思ったのだが。

「ああ……ごめんね。使用人は連れてきていないんだ」
は？

「……左様でございますか。一人もいらつしやらないと？」
「うん。ここには僕だけで来たんだ」

それ結構困るくなんて言えるわけがないが、困った。これは仕事で格段に増えたぞ。私が心の中で肩を落としたのを察したのか、お客様が申し訳なきそうに言った。

「ごめんね。君の仕事を増やしちゃうかもしれないんだけど」

「いえ、お客様が気にされる必要はございません。もともとすべて私の仕事でございます」

仕事が増えたとわかれば、さつきと片付けていかなくては。

とりあえずは荷ほどきから始めようかと部屋を見渡せば、テーブルの上に大きめの袋が一袋置いてある以外に何も見当たらない。大きめの箱とか、服がいっぱい詰まった樽とか一般的なお客様の荷物（結構それだけで部屋がいっぱいになりたりするのだ）が存在しなかった。なんということだろう、もしかして。

「お客様、お荷物は……」

「そのこの机の上の袋だけだよ。やっぱり少ないかな？」

「え、ええ……」

かなり少ないです。いや、荷ほどきの手間が省けてうれし
いけど。

さつきから驚いてしかない気がする。なんというか、このお客様は……つまり……。

「僕は、随分ずいぶん変わっているのでしょうか」

「そのようでございますね」

即答してしまった。

思わず飛び出してしまった言葉に、お客様は笑いをこらえているようだった。

「君は正直だね」

院長に会った時と、同じことをやってしまった。これは反省せねば。うなだれる私に、お客様は重ねて聞いてきた。

「で、変わっている僕を、君はどう思う？」

視線が何かを窺っているような気がした。

「……正直に申し上げても？」

「どうぞ」

「荷ほどきの手間が省けたので、大変好ましく思いました」

今度こそ彼は破顔した。回答はお気に召したらしい。……

命が繋がった。

「もともと国境っていう場所は首都とは雰囲気違ってね。

礼儀とかしきたりとか、堅苦しいものは苦手なんだ」

という言葉を受けて、言葉遣いをやや崩すことにした。

「さつきから、お客様には驚かされてばかりですよ」

服を吊るしたり聖典をベッドサイドに置いたりとかまごましたものを片付ける私を、お客様はニコニコと眺めている。

「やっぱり、ここに来る人は使用人や荷物やらをたくさん

携えてくるのかな？」

「そうですね、女神さまのもとに身を捧ぐその時まで、慣れ親しんだ環境にいたいと思う人が多いですよ。……それと」

言いかけて、やっぱりやめた。これは本格的に怒られそうだったからだ。

「それと？」

「……最初に想像していた感じと、違ったので」

「軍人らしくないと思った？」

うっ。

「こう……もっと筋骨隆々で、迫力があるのを想像してたでしょ」

「……なんでお分かりになるんです？」

また笑い出した。よく笑う人だ。

「実を言うとね、よく言われるんだ。初対面の敵には大抵舐められたし、妹にも散々言われてたよ、兄様は覇気というものがありません、もっとしっかりなされませってね」

声まねで女性の声を作るのはすごく上手かった。思わず私も笑い出してしまうほどに。

ひとしきり二人で笑ってから、不意にお客様が真顔になった。

「そうだ。僕の呪いについては聞いている？」

「あまり。お家に伝わるものだと聞いてますけど」

「うん。代々家の家系の男にだけ伝わる厄介な奴でね。だんだん身体が動かなくなっていくんだよ」

それでなんだけどね、と彼は説明した。

「君には主に、僕の介助を頼みたい。といっても、いろんなところに出歩こうってわけじゃないんだ。ただ、一回だけ、

この町を少し見て回りたい。その時の付き添いをお願いしたいんだ。その他の時間は僕は一人で女神さまに祈りを捧げる予定だから、ついてもらわなくても構わないよ。頼めるかな？」

「頼めるも何も、それだけでいいんですか？」

「うん。もともとこの町に何かをしに来たわけではないからね」

「でも滞在が長くなると、なにかやりたくありません？」

「それはないよ、と言って彼は笑った。」

「わかるんだ。僕はここにそんなに長く滞在しない……短い間だけど、どうかよろしく」

「……精一杯務めさせていただきます」

窓の外を見て、暗くなっていることに気が付いたらしい。

「今日はもう大丈夫。明日午後になったら来てくれるかな」

その言葉には有無を言わさない静かな力があって、その時初めて私はこの人が軍人だということを思い出したのだ。

ドアを閉めてから、少し考える。

不思議な人だった。なんだか気になるというか。

気になる理由を考えたいけれど、答えが出ないのでやめた。

いつものように食堂で朝食をとっていると、リイサが駆け寄ってきた。

「ちよっとちよっと、今ヤーデが担当してる人って、あの国境の將軍なんでしょ？ 大丈夫なの？」

「大丈夫って？」

ちゃんとリイサの手にパンが握られていることを確認して安心した私は、ゆで卵の殻をむくのに悪戦苦闘していた。日によってむきやすい日とむきにくい日があるのだ。

「有名な話でしょ！ 代々国境で戦ってる血まみれの一族、恐ろしく強い代わりに呪いを受けていて、とりわけ今の当主は残忍でたくさんの敵を殺してるって！」

きつとお話に出てくる鬼みたいな顔してるんでしょ！ と目じりを引っ張って見せる彼女はとっても可愛い。

「んー……なんかこう、ふわっとしてたよ」

「ふわっと？ ウソでしょ？」

「嘘じゃないって。仕事はすごい楽だし、失礼な口利いても怒られないし」

「ヤーデ、鬼に向かって失礼な口利いたわけ?! よく生きてたわね！」

「私、その血まみれのなんちゃらって話、聞いたことないもん」

「ほんとヤーデって、肝が据わってるし、世間知らずだし……」

リイサは深く深く溜息をついた。あれ、なんだかこの光景前も見た気がする。

リイサが静かになったと思ったら、今度はちよっど通りかかった同僚が声をかけてきた。

「ようヤーデ、生きてるか？ お前、例の血まみれ將軍の担当なんだって？」

やっぱりお話の以下略。

「別に普通の顔だったよ」

軍人として普通かは別として、人間としては普通の顔だ。

「そうなのか、いやすげえよな、聞いたことあるか？ 隣国の連中の捕虜を串刺しにしておびき寄せる餌にしたって話！」

そう語る彼の顔はリイサとは違って、忌避の中に少しの高揚を含んでいた。

「いくら隣国の連中が異教徒だからって、えぐいよな。ヤーデ、お前も下手したら殺されちゃうかもな！」

ひとしきり喋りたいことを喋って、彼は去っていった。

なるほど、これは皆担当したがないわけだ。ここまですさまじい評判の人物だったとは。

「ヤーデ、ほんとに大丈夫？」

リイサはなおも心配そうだ。

「まあ別に、関係ないよ。仕事だし」

「すごいね、そんな風に割り切るの、私はとても出来そうにないわ」

「だってさ、別にずっとってわけじゃないでしょ」

私はパンを飲み込んで、席を立った。

「お客様だもん。ごはんがあれば私は何でもやれるよ」

そう、お客様なのだから。

一通りの手配を終えて、私はお客様の部屋に向かっていた。

手配のついでに、彼の呪いの状態についても確認をした。

それは四肢の末端から徐々に力が入らなくなっていくもので、すでに手足は動かないか、とても弱い力しか出せないかだそう。実は呪い自体は結構前から発動していたらしく、今まで無理を押して前線で指揮を執っていたというから恐れ入る。内臓も弱っており、食事の提供は断られたらしい。そういうえば、昨日話している間、彼はベッドから少しも動かなかつた。すでに自力で動くことができないのかもしれない。

その上で、どうやって町を見て回るのか？ 結構な無理難題ではあるのだけれど、ここは聖地だ。たくさんのワガママ、

もとい最後の願いを叶えてきた院には便利なものが存在している。

お客様の部屋についた。部屋の前では私が予め頼んでおいたものと、力自慢な男の先輩二人が待機している。その顔はなんとなく憂鬱そうに見えた。

「お疲れ様です」

一応挨拶してみる。返事がなかった。

心の中で肩をすくめて、ドアをノックする。

「ヤーデちゃん？」

「はい」

「どうぞ」

ドアを開ける。先に入った私に続いて入ってきたものを見て、彼が目を丸くしたのが見えた。

「噂通り、美しい町だね」

このところはずっとスツキリとした晴れの日が続いていて、聖地の町並みは陽の光に照らされてその姿を美しく見せていた。

「あの様式。およそ二百年前に流行したものだ。あの頃は戦争が終わって、花の模様を彫り込むのが流行した。……その

後の別の戦争で、ほとんど壊れてしまったけどね」

お客様は随分詳しいようで、あれこれと眺めては説明してくれる。私はそれをよく知っているなあと感心しながら聞いていた。私は働いている上で、建物自体に興味を持ったことが一回もなかったからだ。

くるくると色々な方向を見て回る目が、一点で止まった。「……あれは？」

その視線の先には、地面に座り込んでいる人達の姿がある。それは私にとつて見たくないものだった。

着ている服は私達見送り人と比べてはるかに古くボロボロで、着ざらしといったところだ。町を歩く人々は彼らのそばを避けて通っていて、中にはあからさまに顔をしかめている人もいる。

「……ああ、あれは修道院の炊き出しを待っている人たちですよ」

いわゆる貧民、流民、その日の糧にも事欠く人々だ。

女神さまは慈悲深く、その慈悲を体現することは修道院の務めである。よって一日一回炊き出しをしていて、それだけを頼りに生活している人たちがこの町には結構いるのだ。

しかし修道院が彼らの生活そのものの面倒を見ることはない。修道院は生を全うし、金と権力を蓄えることが出来た人に対して存在しているのであって、女神さまの推奨する勤勉

さを欠く貧民どもには扉を開かないのだ。

その旨を説明すると、お客様は不思議な顔をした。まるでショックを受けたかのような。

「その者達は、院で見送り人をやることは出来ないのかい？」
「見送り人って、大体身分の高い人たち相手にやる仕事ですから」

その言葉で察したようだった。

彼らを見たくないから、私はあまり町に出るのが好きじゃない。説明するのは、ほんの少しだけ嫌だった。仕事だから大丈夫だけけど。

しばらく無言になってしまった。

静寂を破るように、お客様が明るい声を出した。

「それにしても、これには驚いたよ。さすが聖地だ」

お客様がこれと言っているのは、現在進行形でお客様が乗っているものだ。

「椅子と車輪を組み合わせるなんて、初めて見た。これで動けない人も出歩くことが出来るというわけだね」

「そうですね。私達は、車椅子って呼んでます。昔のお客様にとんでもなく賢い人がいて、動けなくなっても散歩したいからって考えたらしいですよ」

木でできた車輪はとつてもガタガタして坐り心地はあまりよくないし、人が押す必要があるけれど、ゆっくり進めば間

題ない。初めて見た時は私も驚いた。

そこでふと考える。

「ていうか、身体動かせないんですよ？ 車椅子があったからよかったですけど、最初はどのようなつもりだったんですか？」

「杖を使おうと思っていたんだ」

無理でしょ。表情から私の考えていることがわかったのか、彼が苦笑いする。

「その時はね、頑張ればいけるかと思っただよ。今までだつてそうしてきた。出来ないって思ったことも、何とか抑え込んでやってきたから」

そこでふと黙り込んで前を見つめた。しばらくの静寂。

「……出来ないことも、あるんだな」

消え入るような呟きだった。

しばらくくふらふらと町を回るうちに、聖地の中心、聖なる火に近づいてきた。今日もとりのりの色を纏まとって、天に向かつて燃え盛っている。

「ああ、あれが聖なる火ですよ」
指さす。

「あれが……」

彼は食い入るように見つめている。あまりにも真剣に見つめているものだから、つい魔が差してしまった。

「一回触ってみますか？」

「そうだね、一回触って……って、ええ!? 突然何を言ひ出すんだい？ 火傷してしまうよ!」

「だーいじょうぶですって、なんなら私が先に触ってみましようか？」

火に近づく。

「だ、駄目だよ! そんなことはさせられない。君は知らないかもしれないけれどね、火に触ると肌は……あああー!」

私は火に手を突っ込んだ。その瞬間、彼が目を瞑つむる。

「ほらー、大丈夫ですよ。目開けてください」

その後も少し目を瞑ったままだったが、恐る恐るといった感じに開いた。

「……燃えてない」

私の手のひらが火の中で泳いでいた。

「聖なる火は、遺体しか燃やさないんですよ。それ以外の物を火の中に入れても、どうもしないんです」

遺体は綺麗に灰になる。女神さまは意味のないことはしないのだと、ちよつと前に偉い司祭の人が言っていたつけ。

「手、入れてみますか？」

かすかに頷いたのを見て、彼の手を取る。そうつと火の中に差し込んだ。傷だらけの手のひらの周りを、紫、橙、黄、赤、青、色とりどりの火が揺らめく。

「美しいな」

囁くくらい大きさの声で呟いている。

「美しい……それと同じくらい、恐ろしい」

「恐ろしいですか？」

「恐ろしいというのは、少し違うかもしれない……畏ろしい、の方が近い」

なんだかわからないけれど、彼は火が怖いようだった。

「私はこの火、結構好きですよ」

その言葉を聞いて、彼はふふつと笑った。

「聖なる火を、結構好き、か。院に仕えるものとしては当然のことかもね」

「聖なるものとかそれだけじゃなくって、この火って影がないじゃないですか」

女神の火はひたすら美しく、周りには暗いところがない。

「そこが一番すごいと思うんです」

笑われるかと思っただけで、軽く微笑まれただけだった。

「なるほどね。何となく、分かる気がするよ」

しばらく二人で、火を見つめ続けていた。

散策も終わり、院に戻る途中で、私はどうしても気になっていたことを口に出した。

「あの、すみません。さっきの見送り人の二人、失礼な態度を取りましたよね」

気分を害されましたか？と聞けば、笑って、

「大丈夫だよ。ああいう反応は慣れてるから」

さすがに男性一人を車椅子に乗せるのは私一人では無理なので、手伝いを頼んだのだ。最初は普通に探していたのだけれど、相手が血まみれ將軍だと分かるとみんなに断られてしまったので、最後は院長に頼むことになってしまった。

院長に命じられてしぶしぶやって来た二人は介助の間ずっとお客様と目を合わせないようにしていたし、なんなら一人はあからさまに嫌な顔をしていた。

それで気分を害したかもしれないのに、慣れているときえ言わせてしまった。申し訳なきが募る。

「あの二人、今度もまた失礼な態度を取るかもしれません。」

そうしたら本当に申し訳ありません」

「大丈夫。……君は、そういう反応をしないんだね」

「そういう反応？」

「つまり、僕のことを怖がったりとかさ」

ああ、そういうことか。

「お恥ずかしいんですけど、私、何にも知らなかったんですよ。世間知らずで。聖地の建物がどうとかも全然知らないんです」

私は人より知っていることもあるけれど、知らないことの方が多し。

「いや、知らないことは確かに良くないかもしれない。でも、重要なのは知ることより、知ってどうするかだよ」

「知って、どうするか」

そう、と言って彼は微笑んだ。

「きつと君は、知ったうえで良い選択が出来る人だ」

一日ずっと、彼に言われたことを考えていた。知って、どうするか。

知ることは重要で、力になる。私はそれを人に教えてもらった。知る前よりも知った後の方が私は楽に生きていると思うし、ごはんもたくさん食べられている。

私は、私が生きていた世界とは別の世界があることを知った。その結果どうなったか？

いわゆる答えの出ない問いというやつなんだろうか、ということを考えながら、彼の部屋をノックした。

「ヤーデちゃん？ どうぞ」

部屋に入る。

「ご気分はどうですか？」

「大丈夫。今日は、しばらく話に付き合ってくれないかな」

頷いて、私はベッドの脇に置かれている椅子に座った。

「どんな話ですか？」

「突然なんだけれど、僕の話聞いてほしいんだ」

それは確かに突然だ。

「何故って聞いてもいいですか？」

「何故だろう。それは自分でも分からないんだけど、今まで自分のことを人に話したことが無かったと思って」

君に聞いてほしいと思ったんだ。と、彼は言った。

「それ、私でいいんですか？」

「君に聞いてほしいんだ。何故だろうね、君が見送り人だからかな」

かすかに笑って、彼は話し始めた。

僕が代々国境を守る家の出身だつて話は、聞いているかな？ 聞いているか。

僕は、自分が死ぬことを知っていた。父が今の僕と同じくらいの年齢で死んだのは僕がまだ小さい時でね。今の僕と同じように、四肢から動けなくなっていく。僕はそれをそばで見つめていた。ずっとね。

動けなくなる中、しきりに父は言っていた。「女神さまの御許に行きたい」と。遺言はもちろん、遺体は死後、聖地にとのことだった。

優しい父だった。やっぱり鬼だなんだと言われていたけど、僕にとつてはとても優しい父だった。父のことは愛していたよ。おかげで、幼いうちに学ぶことができた。

死とは喪失と悲しみなのだ。

僕は臆病なんだ。失うのがずっと怖かった。それは妹だったり自分の命だったりしたけれど、とにかく怖かったんだ。

国境は命が軽い場所だ。いつか呪いで死ぬくらいなら戦場に出たいと思つてずつと戦場で過ごしたけれど、僕は臆病だったから、自分の命を捨てたくなかった。

だから敵をたくさん殺した。……敵を串刺しにしたって？ うん。それで相手が戦意を失ってくれるなら、僕が死ぬ可能性が低くなる。そう思つたんだ。滑稽こっけいだよ。いつか死ぬことが決まっているのに。

呪いは女神さまに嫌われているのだから話がある。

だから我が家は国境に封ぜられているのだけれど、同時に女神さまのために戦わなければいけない。この国は女神さまに祝福されているけれど、僕はそうじゃないんだ。光あふれる国の中で、何故僕は呪われている？

結局僕は戦場で死ぬことはなかった。正確には、死のうとされたけれど、臣下に止められた。

だから、確かめようと思つたんだ。この世には、父が渴望した女神さまの御許みもとになら、光しかない場所があると。

影がない場所があると。

「ごめん。支離滅裂だったね」

途切れ途切れだが話し終わった時には、長い時間が経つて

いた。

「正直、わからないことだらけでした」

私は死ぬことがそんなに怖いと思わない。どうせみんな旅立つのだし、それが早いか遅いかの違いだと思う。死を恐れることに關しての感情は複雑すぎて私には理解できないと思う。

「そうだよね」

彼は力なく微笑んだ。

「ですけど、一つだけわかるところがありました」

「どこだい？」

「光しかない場所が知りたいってところですよ」

「何故？」

「私も影にいたからですよ」

不思議そうな顔をしている。

「私は、この町にうろつく貧民のうちの一人だったんです」

驚いた顔をしている。

「もともと、親と一緒に来たんですけど。すぐに死にました。」

そのままずっと、炊き出しを食べたり、残飯をあさったり」

「そんな小さい子が……」

「あのままだったら今頃死んでましたね」

「だったら、何故今見送り人をしているんだい？」

「言葉遣いとか、礼儀とか、最低限の常識を教えてくれた人

がいたんです。その人の紹介で、仕事にもありつけました」
それで院で働き始めた。下っ端の下っ端の仕事はきついこともあるけど、ごはんが朝昼晩食べられることは何事にも代えがたい。ごはんを食べると、今も生きているという実感が湧くのだ。

「だから、私も知ってるんですよ。影のことを」

院で働き始めてから、世間の人たちがこの町のことを聖地と呼んでいることを知った。女神さまの慈悲の象徴、光あふれる場所。

そして、私がどれだけ何も知らなかったかを知った。

「そうだったのか……」

彼は不思議な顔をしていた。泣きそうな、でも怒りそうな、今にも笑い出しそうな。

「この町にも、影はあつたんですよ」

「ああ、そうだね」

「どうでしたか」

「どうだろう」

わからないんだ、と彼は言った。

「今わかっていることは、知りたいことを知ることが出来たから、僕はもう後悔なく死ぬことが出来る、ということかな」
それから、彼は改めてこちらに向き直った。

「聞いてくれてありがとう。僕は全然駄目だったけれど、君

はきつと知ることでもいい選択が出来る人だ」

昨日と同じことを繰り返して、彼は言った。

「僕を見送ってくれてありがとう。君に、女神さまの祝福がありますように」

今日は疲れたから寝るよ、と言って彼は目を閉じた。私は静かに部屋を去った。

やっぱり朝食はしっかり食べておきたい。パンはもちもちしてとってもおいしいけれど、やっぱりもつと分厚ければいいのにと思ってしまう。今日は担当がない日だから、たくさん食べておかなくては。

「ヤーデ、今日のパンよ」

リイサは今日も変わらずパンを分けてくれる。陽の光に当たってきらめく金髪は今日も変わらず可愛い。

「今日も随分勢いよく食べてるのね」

「担当がない日だからね。頑張らないと」

そうだったわ、とリイサは気づいたようだった。

「あのお客様、昨日見送ったのよね」

「うん。四日間ずっと寝てたよ」

結局あの後目を閉じてから、彼は目を開くことはなかった。そのまま四日間眠り続け、昨日静かに心臓が止まった。遺体は速やかに火に捧げられた。色とりどりの火は、瞬く間に彼を灰に変えた。

「結局大丈夫だったわね。よかったわ」

リイサは結構本気で心配してくれていたようだった。うれしいのと反発と半々なので、とりあえず黙っておく。

「ようヤーデ！ 生きてるか！」

「残念ながら生きてるよ」

冗談で言ったつもりなのだけれど、彼は本当に少し残念そ

うだった。

「お前の客旅立ちしまったんだって？ もったいねーな、まだ生きてたら異教徒もつと殺してくれたかもしれないねーのによ」
そっちなか。相変わらず言いたいことだけ言って去っていった。

その後ろ姿をゆで卵をもふもふ食べながら眺めていると、リイサが問いかけた。

「ねえ、ヤーデは何で食べるのが好きなの？」

「んー」

少し考える。

「食べてると、生きてるって感じがするじゃない？」

笑われるかと思っただけれど、リイサは笑わなかった。

「そうね、毎日誰かが旅立つもの、生きてるって感じることは大事なことよね」

うんうんと頷いている。その様子を見て、少し聞いてみようと思った。

「ねえリイサはさ」

「なあに？」

「何かを知って、それが望んだものと違った場合、どうする？」

「随分と漠然とした質問ね」

困っているようだった。それでもきちんと考えてくれるのが、リイサの好きなのところだ。

「女神さまは、聖典でおっしゃっているわね。『与えられたものは、なんであれ享受しなさい。それが私の慈悲である』って」

でも、ヤーデが言ってるのはそういうことじゃないのよね？
首を傾げるリイサに頷いた。

「何か、つていうのがよくわからないけれど。私だったらもつと知りたいと思うかしら」

「どうして？」

「もつと知ったら、それについて納得できるようになるかもしれないでしょ。それか、変えることが出来るかもしれないわ」

大変かもしれないけどね。と微笑む顔は、とても綺麗だと思っただ。

「この答えで大丈夫？」

「うん。すつごく参考になったよ」

「それはよかったわ」

光しくない場所に行きたい。私は彼と違って生きている。とりあえず今は、

「うん、私は今日も頑張るよ」

そう呟いて、最後のパンのひとかけらを口に放り込んだ。